

原告団

遺族・CO裁 判、災害責任 追求、特集号

第四十三号



元気なときの貞雄さん。次男の正信君を抱いて……

松森加枝さん。三川鉾炭じん大爆発で命を奪われた、松森貞雄さん(行年五十二歳)の妻。
住まい、熊本県荒尾市緑ヶ丘桂町八十二棟の三井鉾山鉾山鉾住宅。家族に、男の子ばかり二人。長男は貞行君。高校をこの春卒業(十九歳、昭和三十一年八月三十一日誕生)。次男は正信君。こんど高校の三年生(十七歳、昭和三十三年十一月二十七日誕生)。
加枝さんは大正七年六月二十九日生まれで、今年が五十七歳。荒尾アソニット工場(遺族の生活対策として誘致された企業)に通っては、「ヒゲ切り」が毎日のおもな仕事。
いま、三池労組本部のCO・遺族守る会事務局に保管されている「遺族の生活実態調査」という資料(昭和四十三年作成)を見



庭のキンカンの木。貞雄さんが、生前植えた。実が、まばらに光っていたが、爆発の年は鈴なりだったのだそう。「余りななり方だったので、かえって不吉な感じでしたのが……」、と加枝さんは目がしらをおさえる。

遺族・松森加枝さんの

その後

と、加枝さんの項に次のことが記されていた。
九百八十六円

「子ども二人弱いため、毎月病院費用二千円位必要。本人も内長男の貞行君もいたが、以下は外科、耳鼻科で診療。それに高血圧の目の一問一答。
現在の収入と会社補償とでは足りません。仕方なく、預金で補います。四月分給料、二十万で九千九百八十六円十六千円一万五千

突然の不幸

大変なめにあいましたね。加枝さん、ありがとうございます。運よく九百八十六円十六千円一万五千

サロンパスはって

日給千五百八十円の仕事だけ……

かすんでいるあの日の記憶

たどる記憶

昭和三十八年十一月九日、あなたが三川鉾で爆発が起きたことを知ったのは、いつごろなんですか。
加枝さん ……(ふと)体がごとごと座りながら、しきりに頭をかきしめるばかり。
— 思い出せませんか。
加枝さん あの日のことは、どうも記憶がさすんでいて、何がどうだったのやら、わからんです。よほど、頭がぼんやりしてたんでしょう。
— あんまり突然なことがあったから、無理なはずね。
加枝さん 天領病院(三井鉾山鉾)に入院して見たり、三川支部(三池労組)に入院して見たり。
— 主人の消息がわからなかったんです。

父の思い出

昭和三十八年十一月九日、あなたが三川鉾で爆発が起きたことを知ったのは、いつごろなんですか。
加枝さん ……(ふと)体がごとごと座りながら、しきりに頭をかきしめるばかり。
— 思い出せませんか。
加枝さん あの日のことは、どうも記憶がさすんでいて、何がどうだったのやら、わからんです。よほど、頭がぼんやりしてたんでしょう。
— あんまり突然なことがあったから、無理なはずね。
加枝さん 天領病院(三井鉾山鉾)に入院して見たり、三川支部(三池労組)に入院して見たり。
— 主人の消息がわからなかったんです。

危うく火事

昭和三十八年十一月九日、あなたが三川鉾で爆発が起きたことを知ったのは、いつごろなんですか。
加枝さん ……(ふと)体がごとごと座りながら、しきりに頭をかきしめるばかり。
— 思い出せませんか。
加枝さん あの日のことは、どうも記憶がさすんでいて、何がどうだったのやら、わからんです。よほど、頭がぼんやりしてたんでしょう。
— あんまり突然なことがあったから、無理なはずね。
加枝さん 天領病院(三井鉾山鉾)に入院して見たり、三川支部(三池労組)に入院して見たり。
— 主人の消息がわからなかったんです。

停年過ぎて

昭和三十八年十一月九日、あなたが三川鉾で爆発が起きたことを知ったのは、いつごろなんですか。
加枝さん ……(ふと)体がごとごと座りながら、しきりに頭をかきしめるばかり。
— 思い出せませんか。
加枝さん あの日のことは、どうも記憶がさすんでいて、何がどうだったのやら、わからんです。よほど、頭がぼんやりしてたんでしょう。
— あんまり突然なことがあったから、無理なはずね。
加枝さん 天領病院(三井鉾山鉾)に入院して見たり、三川支部(三池労組)に入院して見たり。
— 主人の消息がわからなかったんです。